

2019年11月研究会

研究発表

「私の珍品カメラ10台」

会員番号0022 高島 鎮雄

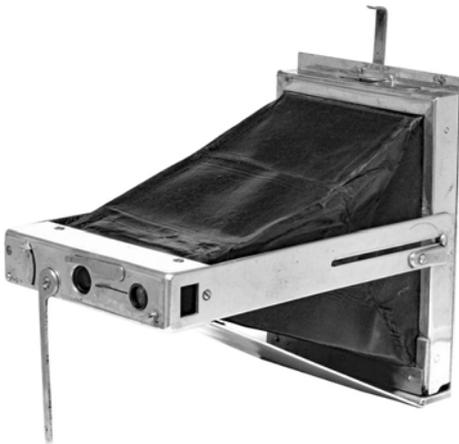


写真1 ポケットサイコ No. 1

私のこのシリーズも5回目になりました。あまりに特殊なカメラばかりだと皆さんに飽きられてしまいそうなので、今回は比較的身近なジャンルのカメラから、ちょっと珍しいものを10台ご紹介したいと思います。

タスキが2本だけのフォールディングカメラ:

1902年 ポケットサイコ No.1 (英) (写真1)

アメリカのエクスポやティッカでも知られるスウェーデンのマグヌス・ニールの設計になる、簡潔な乾板カメラ。英国ではロンドンのジョン・J. グリフィン・アンド・ソン社が製造販売したが、ベルギーでも作られ、大陸ではローパなどの名前で売られた。

No.1が6.5×9cm、No.2が8×10.5cmで、他のサイズもある。たたむと90×145×22mmのアルミの弁当箱のようになる。レンズボックスを引き出すと左右一本ずつの腕が、厚く強情なワンプリーツの蛇腹を引いて伸びるので



写真2 コダック プレモエッテ ジュニア

ロックすると直角になる。大小2穴のスライド絞りと単速ギロチンシャッターというシンプルなカメラだ。

奇妙な繰り出しのフォールディングカメラ

1911年 Kodakプレモエッテ ジュニア(米) (写真2)

ベースボード型のフィルムパック・カメラで、“小さいプレモ”の名称からして、コダックが吸収したロチェスター・オプティカル社の流れをくむカメラだろう。前蓋兼のベースボードにはレールはなく、引き下ろしても60度近くまでしか下がらない。その先端には金属のブロックがあり、2列のスリット状のソケットがある。そこにレンズボード下方のペロを差し込むと焦点面と平行になる。ベースボードには「6~20



写真3 オカム

フィートの被写体には前のスリットを使う、20フィート以遠の被写体には後ろのスリットを使う」というプレートが貼り付けられている。これが焦点調節である。ジュニアは2 1/4×3 1/4の大名刺で、この上に2 1/2×4 1/4のNo.1Aもある。この透視ファインダー付きは最初のモデルで、2、3型は反射ファインダーになる。1、2、3、4の絞りを持つ単玉レンズと25、B、T、50のボールベアリング・シャッターをもつコダックらしい入門カメラ。

変わったシャッターのカメラ

1926年 オカム(チェコスロバキア)(写真3、4)

一見なんの変哲もない4.5×6cm乾板用ボックスカメラだが、極めて特殊なシャッターをもっている。すなわち焦点面の直前に、左

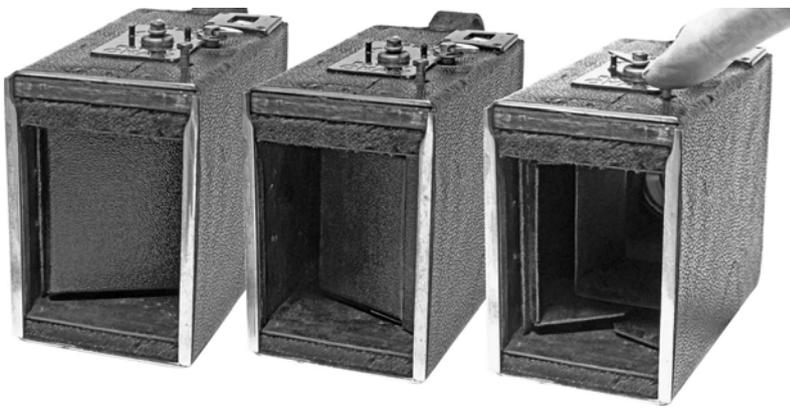


写真4 オカムのメタルプレートシャッター

左がシャッターを切った未チャージの状態、中央がチャージした状態でセルフキャッピングだ。右はバルブで全開にしたところ。



写真5 バルダ ピエレット

右両端の縦軸をピボットとする2枚の大きなシャッターブレードがある。ボディ上面のキーでチャージすると、右の先幕ブレードが焦点面を覆い、左の後幕が前方にセットされる。

ボディ上面右後方のボタンでリリースすると、まず先幕が前方にたたまれ、追って後幕が後退して焦点面を覆う。そのギャップで露光が行われるが、それはちょうどストリッパーが両手の扇子でパツ、パツとやるのに似ている。ボディ上面にはシャッタースピードのセレクターがあり、T、5、10、50、100、1000分の1秒に変速する。速度はもっぱらスプリングのテンションで変えている。1/1000は実測1/650ほどで、決して悪くなく、むしろ低速が早過ぎるのが気にかかる。

レンズはマイヤー・ゲルリッツのダブルアナスティグマート、ヘリオプラン1:6、10.5cm。4.5×6cm判には少々長い。

全金属製で、かなり重い。

半自動たたみ込みのスプリングカメラ

1932年 バルダ ピエレット(独)(写真5、6)

ハンドカメラの歴史を見ると、まず1)前蓋兼ベースボードのレール上にレンズボードを引き出し出てくるタイプ、2)様々なタスキの働きにより前蓋を引き下ろすと自動的に組み上がり撮影体勢になるセルフエレクトリングタイプ、3)解放ボタンを押すとスプリングでパタパタと自動的に組み上がり即撮影体勢になるスプリングカメラの三段階で発達してきた。スプリングカメラは全ての事象が近代化され、スピードアップされつつある時代に適合したために大いに流行した。しかし撮影後たたみこむのは意外に面倒であった。それを簡便化しようとする試みの一つが本機であった。ボディ側面の解放ボタンを押すと、前蓋が左右に押し開かれ、スプリングに押されてレンズボードが定位置に出てくる。レンズボードの上下にはなにやら物々しい飾りみたいなものが付いている。これがたたむ際の指がかりで、それらに指を当ててボディ側へ押し込めば自動的に

畳み込まれ、左右の前蓋がパチンと閉まる(写真6)。この際2枚の前蓋が衝突しないように、まず向かって左が閉まり、右が追うようにうまくタイムラグが作られている。このシステムは同じ年のグルンツ・インゴ(とそのローデンシュトック版のロディネッテ)に似たところがあり、また1950年のフォクトレンダー・ビテッサのアイデアの源泉にもなっているように思える。127全判のロールフィルムカメラで、私はヴィンダー75mm F4.5付きとトリオプラン75mm F3.5付きの2台を所有している。

レフではない二眼カメラ

1933年 エダー パテントカメラ(独)(写真7-10)

カメラが横に2台並んだいわゆるダブルカメラで、セミ判としては大きい。ファインダーカメラの光路にミラーを持たず、後ろのピントグラスで天地左右逆像を見るので、レフではな

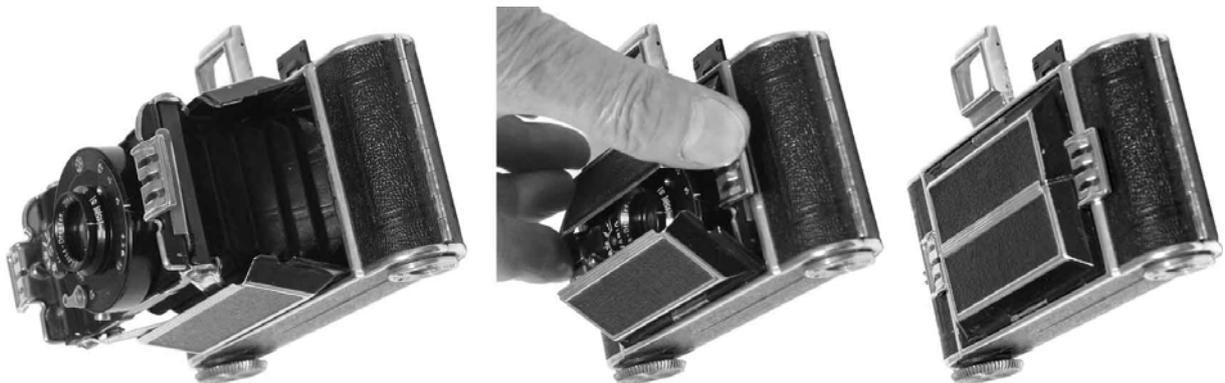


写真6 バルダ ピエレットの半自動の折り畳み方法。押し込んで行くとまず向こう側が閉じ、次いでこちら側が開まる。



写真7 エダー パテントカメラ



←写真8
エダーの裏蓋を開けた所

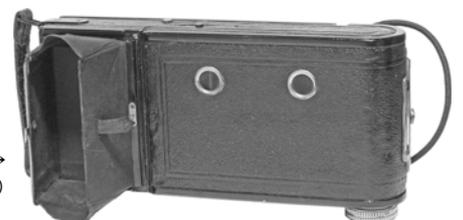


写真9→
エダーの背面(ファインダー)

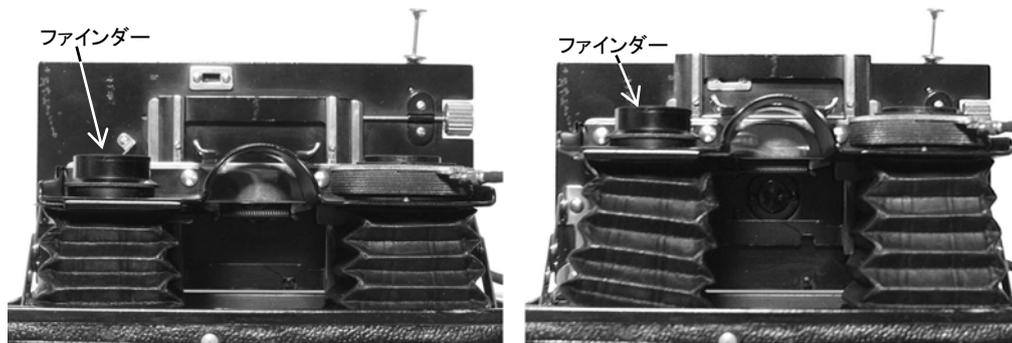


写真 10 エダーの焦点合わせ時のファインダーのパララックス補正の動き

い。スプリングカメラではなく、ベースボードのレールにレンズボードを引き出したのちラック&ピニオンで焦点調節する距離計(?)連動機。ファインダーレンズは左右にスライドできるようになっており、通常はスプリングに向かって右に引かれており、光軸が撮影レンズと平行になっている。ピント合わせで繰り出していくと、下のガイドによりファインダーレンズが撮影レンズ側へスライドしていく。誠にもって原始的だが、パララックス自動修正なのである(写真10)。この上に大名刺判もあるがそれは乾板用なので、本機は世界中でも唯一の珍形式カメラだ。120フィルムのハーフサイズで、レンズはテッサー 75mm F4.5。コンパー・シャッターはリムに例のラーメン井の装飾のある初期型。

ユニークな形のセミ判カメラ

1934年 ローランド モデル1(独)(写真11、12)

カール・ツァイスにあってアナスティグマート、プロター、ドッペル・プロター、プラナー、ウナー、テッサー、マグナーなど多くの名レンズを生んだDr.パウル・ルドルフが、CZを辞したのちに設計した明るいレンズがプラズマートだ。長短が映画用などにゲルリッツのマイアーで作られた。本機はそのクラインビルト・プラズマート75mm F2.7レンズを一般の使用に供するために設計されたもの。ボディはルドルフとDr.ヴィンクラーとの共同設計とされる。明るいレンズは焦点深度が浅いので厳密なピント合わせが要求され、そのため本機では蛇腹を廃し、太い沈胴式にしている。また横位置主体としているので、大きなコリブリといった感もある。距離計連動で、この1型は光学式露出計をもつ(2型は露出計がなく、代わりに自動式のフィルムカウンターが付く)。レンズの前枠の周囲には Kreinbild-Plasmat.



写真13 シネカメラのような35mmカメラ“デュカ”右の写真のようにアグファ・カセットを装填。

Dr.P.Rudolph. DRP(ドイツ帝国特許) Nr.572222. 1:2.7. F=70mm sechslinsing(6枚レンズ) K. Rudolph Hannover nr.1169と刻印されている。生産量が少なかったため、今日では高価である。

シネカメラみたいな35mmカメラ

1946年 デュカ(伊)(写真13)

引き伸ばし機で知られるダースト(Durstはイタリア語ではデュルストだろう)の製品。イタリアは1943年に第二次大戦で降伏しているが、それにしてもそれからわずか3年でこんな洒落たカメラを作れたのは驚異である。ドイツのアグファが1937年に実用化し、戦後ラピッド・カセットとしてかなり普及したアグファ・カセットを用い、35mmフルサイズのミニマムを狙った意欲作だ。幅ギリギリにアグファ・カセットを収容、縦位置で24×36mmのフルサイズを撮る。左側面の大きなレバーでフィルムを送るとその中程の駒数計がコマ進むの感じが利いている。シャッターはP(B)と1/30秒なのでエバーセットだろうが、フィルムを送らないと切れない二重露出防止付き。レンズは50mm F8だからRRで、前玉を回転して1~3mと3m~無限遠に合わせられる。

ハンマートーンの塗装には、黒の他に白、赤、茶、青があった。私のは青である。簡単カメラだがよく写る。

ミッキーマウス型のカメラ

1971年 ミカマティック(米)(写真14、15)

アメリカや日本には様々なキャラクターを形どった子供用の入門カメラがあるが、中でも究極的なのがディズニーのライセンスで作られたMic-A-Maticであろう。チャイルド・ガイダンス・プロダクツ社の製品で、生産終了後の一時期アメリカでも高値を呼んだが、今は落



写真 11 ローランド Mod. 1



写真 12 横から見たローランド大型の沈胴型レンズを使用している。

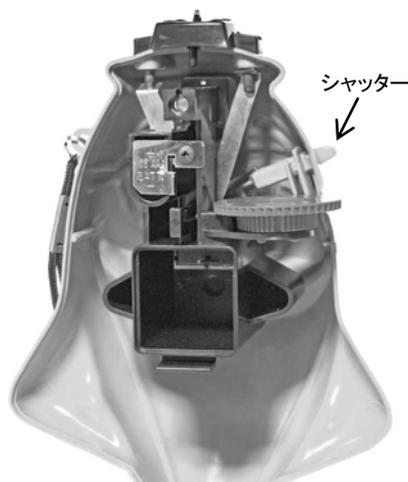
ち着いているらしい。126インスタマティック・フィルム専用で、シンクローミナルがあるから、専用のフラッシュガンがあったのだろう。この初期型では大きな右耳がシャッターレリー



写真 14 ミカマティック、鼻がレンズ



写真 15 裏側から内部構造を見る



↑写真17 チャーリー・ツナの内部、カメラ構造はミカマティックと同じようだ。
←写真16 チャーリー・ツナ、レンズは口の中にある。



写真 18 リッチレイ-6、中央のレンズに見えるのはダミーレンズ。撮影レンズは右隣の黒っぽい小さい円形のものである。



写真 19 リッチレイ-6の軍艦部を取り外し、プレッシャープレート(写っていない)を抜いて、フィルムを装填する。Z光軸構造は頑丈なベークライト製のボディに守られていて、どうしても見る事はできなかった。

からRRで、シャッターも25、50、100+Bと、スペックは意外に低い。ボディは無垢のベークライトなので、かなり重い。フィルムは上面の金属部分を外し、プレッシャープレートを抜いて装填する。

ズになっているが、手ブレの原因になったようで、後期型では右目の後方にシャッターボタンがついた。子供は大喜びだろうが、私もぶら下げて東京ディズニーランドへ行ったことがある(もう30年も前だが)。

魚がカメラになっちゃった！

1970年頃 チャーリー・ツナ(米)(写真16、17) カメラは他の商品を販売するためのノベルティーグッズになることもある。その一例がアメリカのStar Kist Tuna社のCharile Tunaだ。

マグロの一種のツナの缶詰の増販のために作られたもので、ビーコン・カメラで知られるニューヨーク、ブルックリンのホワイトハウス・プロダクツの製品だ。プラスチックでツナ缶のキャラクターそっくりで作られている。これも126インスタマティック・フィルム用で、頭のところにフラッシュキューブが付けられる。単玉レンズに単速シャッター。

蛇腹を廃したZ光軸カメラ

1953年 リッチレイ-6(日本)(写真18、19)

最後に国産の珍品カメラをひとつ。メーカーか販売会社か不明だが、ボルタ判のリッチレイやリッチレットで知られたリッチレイ商会の6×6cm判カメラ。6×6判のスプリングカメラは撮影時にかなりかさばるので、光軸を屈折させて蛇腹もタスキも前蓋も廃してコンパクトにしようという発想はフランス、アルザフォトのシクロープにも通じる。いずれも2枚のミラーで光軸を屈折させるが、シクロープは垂直に“コ”の字型に曲げて、ボディ前面に後ろ向きに装填したフィルムに露光する。それに対し本機では水平に“Z”字型に曲げて、前向きに装填したフィルムに露光する正真正銘のZ光軸カメラだ。前面中央にダーンと構えるのはダミーレンズで、その右にある小さいのが撮影レンズ。ローゼット・レンズは80mm F8だ